

学校飼育動物の現状と課題

長野県動物愛護センター ハローアニマル

○望月弥生 佐々木智子 小林雅巳 藤森令司 塩入章子 梅澤光男
松澤寿次 斉藤富士雄

1. はじめに

今日、自然や動物とふれあう機会の少ない子どもが多くなっていると言われていいる。子どもの心の発達に動物の与える影響は大きく、学校飼育動物は子どもたちが身近に接することができる存在である。しかし、学校の飼育現場では、動物に適した飼育環境ではないことが多く、飼育に関する知識や経験不足のため、担当教員の負担が増え困惑してしまう場合がある。

当センターでは人と動物が幸せに共存するために、適正な動物飼育方法や接し方などを学校のニーズに合わせ、(社)長野県獣医師会の獣医師と協働し「学校飼養動物支援事業」を実施してきた。

そこで今回、この支援事業を通して得られた学校飼育動物の現状及び効果と今後の課題について報告する。

2. 実施方法

(1) 支援事業実施の流れ

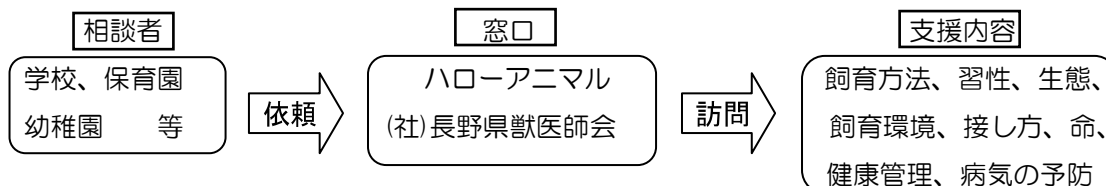


図1 支援事業実施の流れ

(2) 支援の依頼及び事前打ち合わせ

- ア 学校から支援の要望があった場合、事前に飼育動物の種類や飼育環境、飼育頭数等の確認をし、担当教員と支援内容について打ち合わせをする。
- イ 実施日を決定し、「学校飼養動物支援事業申込書」を提出してもらう。
- ウ (社)長野県獣医師会に獣医師の派遣を依頼する。

(3) 支援当日

- ア 飼育舎等の飼育環境の確認をする。
- イ 支援の実施
 - (ア) 学校飼育動物飼い方教室
飼育動物の習性・生態、適正な飼育管理、接し方、心音(命の話)、健康管理、人と動物の共通感染症、質疑応答
 - (イ) 飼育舎およびケージ等の改善指導
- ウ 終了後、担当教員や獣医師とミーティングを行う。

(4) フォローアップ (後日)

ア 聞き取りによる状況確認の実施や飼育相談、要望により再度支援事業の実施。

3. 結果

(1) 実施件数及び対象動物数

平成22・23年度に実施した支援事業の実施状況を(表1)に示した。

表1 支援事業の集計

	H22年度		H23年度	
小学校	11件	ウサギ10件、モルモット2件、カモ1件、インコ1件、ヤギ1件	11件	ウサギ7件、犬1件 ※ 3校は2回実施。
幼稚園	1件	ウサギ1件	2件	ウサギ2件
獣医師会との協働	9件		6件	

(2) 学校飼育動物飼い方教室の内容

飼育動物の特徴や飼育方法等を含め動物の感情表現や気持ちを理解し、動物の立場になって考え行動する力や同じ命であることを実感できるように、学校側のニーズや子どもの理解力に合わせた教室を実施した。主な内容の内訳を(表2)に示した。

表2 学校飼育動物飼い方教室の内訳

区分・項目	年度	H22年度 (12件中)	H23年度 (13件中)
習性生理・接し方		12件	13件
飼育管理方法		12件	13件
心音(命の話)		10件	8件
バースコントロール		8件	7件
健康管理方法		12件	13件
飼育舎・ケージ等の改善		7件	10件
その他		1件	1件

(3) 飼育状況および指摘事項

飼育環境が不適切であった場合や飼育状況を改善していくために、実際の飼育現場において指導やアドバイスを実施した。主な内容を(表3)に示した。

表3 ウサギ、犬の飼育状況および指摘事項

区分・項目		年度	H22年度 (12件中)	H23年度 (13件中)
ウサギ	給餌方法（うち野菜のみ給餌件数）		7件(うち3件)	9件(うち5件)
	給水方法（うち給水なし件数）		3件(うち1件)	3件(うち3件)
	床面汚れ・トイレの設置		5件	7件
	トンネル・穴対策		2件	3件
	チップ・土・敷きワラ等の入替		5件	7件
	隠れ家・木箱等の設置		3件	8件
	かじり木等の設置		5件	7件
	温度湿度対策		8件	7件
	日誌・体重測定実施		5件	8件
	雌雄混同・判別不明		1件	7件
	個体識別なし		1件	2件
	感染症・病気・健康状態不良		4件	7件
	爪切り		2件	5件
	施錠なし		1件	2件
	引継ぎ方法の問題		2件	2件
犬	給餌給水方法			1件
	飼育舎・犬小屋の清掃および改善			1件
	地面の穴・土の入替			1件
	飼育舎の修繕(柵の補修、温度対策)			1件
	日誌・体重測定、健康管理			1件

4. まとめ及び考察

学校で動物を飼育することにより、子どもたちは観察しながら動物とふれあう中で、命の大切さや思いやりの心を育むことが期待でき、他者と協力し飼育管理をすることで責任感や連帯感を持ち、生き物を育てる楽しさと喜びを感じることができるようになる。

このような良い影響を受けるためには、大前提として動物が健康であり、習性や本能を満たす清潔な飼育環境で、生き生きと生活できる飼育管理が必要である。

しかしながら、実際は好ましくない飼育状況であることが多い。その主な原因は、次の通りである。

- ①飼育の経験や知識不足
- ②担当教員の異動や担当学年の交代により引継ぎがうまくいかない
- ③飼育管理予算の問題や学校側の負担

(1) 事業の効果

- ア 飼育状況の問題点を指摘しながら改善対策をアドバイスし、動物を適正に飼育することの効果の説明したことで、飼育に対して目的を持ち、活動できるようになった。
- イ 飼育に関わる負担を軽減し、学校側が対応のできる範囲内で飼育していくことで、子どもたちも掃除や世話だけではなく、ゆとりをもって動物の観察やふれあいができる楽しい動物飼育へと発展することができた。
- ウ 子どもたちに動物も同じ命であること、自分本位でなく動物（相手）の立場になって考えるきっかけになった。
- エ (社)長野県獣医師会と協働することで、飼育動物が病気や負傷した場合に、すぐに学校側が近隣の動物病院へ相談できる体制を構築できた。

(2) 今後の課題と発展

- ア 学校によって飼育のレベルやニーズが異なるため、学校に合わせた適正な飼育方法や接し方（子どもと動物の関わり方）を指導していく必要がある。
- イ 相談する場所がわからない、費用負担が大きい等の理由から動物飼育相談や治療相談ができにくいといった意見が担当教員や保護者から多く聞かれるため、(社)長野県獣医師会と協働し、動物の飼育管理や病気等の相談窓口を県内全域に広報し、普及していく。
- ウ 人とのコミュニケーションや感情のコントロールが苦手な現代の子どもたちに動物飼育の経験を通して、命の大切さや他者への思いやり、仲間との連帯感、責任感、観察力、表現力、忍耐力など様々な情緒や人との関係性を育み、人と動物が幸せに共存できる社会の構築を目指していきたい。